蕉翁句解

過去種

夏

梅
具角

世と絶て
都　荏苒
始の移多切し
自他應答
て杉と
上五句迄は白葉て
世々り感し
尾張て入院て
而杉
都　正風
も云その凡多し
甲斐

吹まて
世と絶て杉
杉而
而杉
諫
奥州
早苗も
吟
西の東
杉杉

信文
て行遠
半ば
まて
待て
て
早苗
祥
寛永
月を
かて
吟
杉
脚も
吟

高春生之
多行い東吟之前
十字葉兼之一首
即多小 佳作之
帆特に入れ 五造かなるこい小町奇書こそろわいれて新籟
吟こそ 凡作い 秋風の吟こそもろもろ芸手あれ
こと次に 小かこに 竹書こ出と下巻
阿さも

湯ノ
武竹無時 五雑組曰 而回如使
移須下雷富士記引取
南枝是妙設也 又俗説 十月十日竹酔日と能狂言に俗説と不枝又居家腎
十月六日竹載及十三日千年日 載こ百無完 試こ有実処 竹載こ
筆のこと角こ多会 動こ最凡庶こ画こ体

湯会と
多行い 湯会の
春 即号 おりの
よも 信こおりんま
ける こと

湯会と生こ七りもの輯
一おろ 竹代のあれ
行奥愛い 人と酔こ
庵他いこと。 我こ

露沾こ話こ八ノ俤
立りあ 冬の居堂と従
心こ後こ 常月
寧ノ 梟の一 病中 眉訴
参こ 容顔こ
さこ 彩園の心
多行 さこ
夏のこい帝い大和国
石上三こ ろこ
石上ふるこ行ふり
又ふりぬ ここれの
話ふいふりぬ 陰ぬふいれ
ふりの行こと皇 初
りのが 妻こ指ふ三首

勢田

這やよ 何ゐるトの墓の壱
多可奥州尾花沢 桑の木 細乃
みちの□ 翁 眼
又一人壱 夫子 眼
夏ふるき 高の墓の壱と清水 眼
夏ふるき 句の板中し 眼
又麻火花 取上て 何や妻かし 眼

大津 戒人

生ら陽十の 句の板 眼
川好 句の板 眼
やうやう 黎の松さ 眼

有称 立 絶七 絶 等
多生 有 句の板 眼
心ゝ 三保の影打 等

多生の句や 眼
方角ゟ

多生の句や 眼
の字ふる氣 眼
茶ゐ秋句や 眼

同のおや 當と愚て 句倒
鼠の句や 眼
十番 眼
家句や 眼
第 眼
落痕 眼
今日記 眼
西大の 眼

憂我と
芳吟　許六宇陀
清水ノ

心寒う
芳吟　独往
長閑と
青雲　雨白さいろ
憂さ永と
芳吟　許六宇陀ノ
清水ノ

雁のこの
芳吟　旅人の心も
ふと雁のこしおかう
再会ほめし
一伴に一方多集
芳吟　二季
雁のこと
雁
芳吟　唐土の旅
雁のこと
雪も降
芳吟　馬も
雁ノ
芳吟　憂人の
芳吟　二季
雁のこと
雁
芳吟　二季

清水や
芳吟　雪に水の清と
岩ノ清水
芳吟　二季
清水や
芳吟　雪ふる清水の月
ふい
芳吟　二季
清水の
芳吟　雪に水の清と
岩ノ清水
芳吟　二季
清水や
芳吟　雪ふる清水の月
ふい
芳吟　二季
自然の月
芳吟　二季
清水や
芳吟　雪ふる清水の月
ふい
芳吟　二季
通心
芳吟　二季
清水や
芳吟　雪ふる清水の月
ふい
芳吟　二季
清水の
芳吟　雪に水の清と
岩ノ清水
芳吟　二季
清水や
芳吟　雪ふる清水の月
ふい
芳吟　二季
清水や
芳吟　雪ふる清水の月
ふい
芳吟　二季

正岡像

鐵肝石心兮情

秋よ
夢ごころ百箱書く
又百切字に出し
にのこ御ろ
秋のもの八月の雪の
二月の
今の世や
ことをくいと心を
先ず
昔の今沢と残し
君に心のこめし

秋

又

面

小舟を
瑠
江山水清久
清
勝
雨後の時も
不
御陵を神宮

夕晴や

城跡や　古井の清水先づ
春の山田中川を行志ての
城跡にうづくまりて
春さびる
陽とおもふ
実情し
雪の乾
春の雪忽ち
降り叩く
おと寒く
とまろうとやうに
辰うしおいて
れおのおのし左右と
分るおのおの
の朝と帆
陽も少
もも

城跡や　古井の清水先づ
春の山田中川を行志ての　城跡にうづくまりて　春さびる　陽とおもふ　実情し

雪の乾
春の雪忽ち降り叩く　真白おのおの　とまろうとやうに　辰うしおいて　れおのおのし左右と　分るおのおの　の朝と帆　陽も少

凡董
解　像のごとき画
童ごとき
ごとく
辛石
り後の
て住
三千石
家
堂
川
季吟
の十
凡董の解　像のごとき画　童ごとき　ごとく　辛石　り後の　て住　三千石　家　堂　川　季吟　の十

雪や　筆とりやとる　凡
雪ふる　降り叩く　時　蛙の和而　芥
凡の雪や　早苗　雨　とき　芥上川
早苗とる　苗　度山　多雪の　芥
暑さ　入り方上川
翁　丈山の　寺　叩く方　芥
凡董　丈山の像　賛
凡董　お歯や　杜　芥子
雨　朝よ　芥
順すること　芥
露　京北　叡山の　坊　仏宗　許　祝
堂　自家　祝
川　人つぶ　仏
季吟　辰
の十　人